

組合員の作品



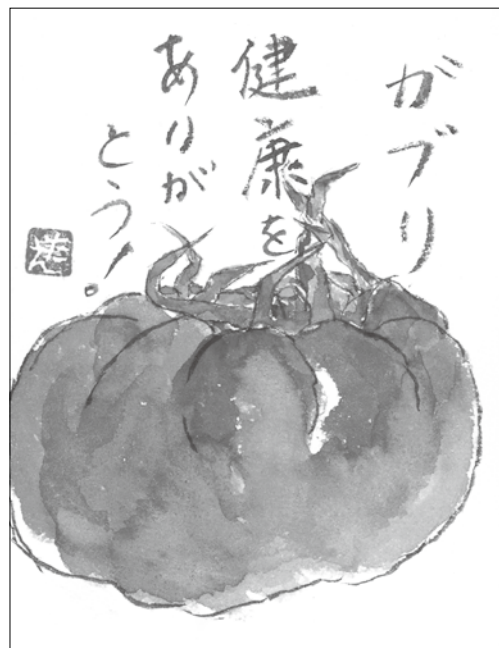
ちぎり絵
守口東支部
中西 昭夫



書
みい支部
花本 晃子



みい支部
垣内 規子



さつき支部
井上 俊子

詩

刻む

成田支部 迫田 智代

本州最北端の地恐山

荒涼とした風景に建つ 戦没者慰霊の碑

幾千幾万の声なき声が聞こえる

さまよえる靈魂

誰にも知られることなく逝った

死者たちの声

そのものにつながる人々の声

忘れてはならない歴史の中で

忘れられた者達の墓碑銘には

憲法九条 戦争の放棄を

強く深く刻んでおこう

詩集「私の旅」より

短歌

シャツを脱ぎ峠の麦畑兄弟で敵機の飛来身を潜めおり

門真中央 兵頭 克己

生きていることが幸いと被災者に言わせて寒き日本の春

さつき支部 中山 惟行

※皆様の投稿をお待ちしています。(写真・短歌・絵手紙・川柳など)

編集委員会 ☎072-882-5025 (組織部まで)

戦後70年を迎えて

昭和20年6月1日 大阪空襲のこと

当時、梅田の新天地と呼ばれる花街のはずれに雑貨屋を営む私の実家があり、7人家族で賑やかに暮らしていましたが、戦争が始まり戦況が厳しくなると周囲の人たちは工場に徴用され、子どもは家族と別れ疎開、残った者は国を守るんだと防空訓練に明け暮れました。

私は140cmそこそこの小さな女学生。2年生になったばかりで、5月1日から学徒動員で神崎川の兵器工場へ。昭和20年6月1日午前10時前、空襲警報が鳴り響き、土を盛り上げただけの防空壕に入り、お腹に響く爆音や高射砲の音など恐ろしくて耳をふさぎ息も殺してしゃがみこんでいました。やがて空襲警報が解除になり外に出ると空は真っ黒、異様な臭いとあちこちで上がる煙にはじめて空襲の恐ろしさを知りました。家に帰ろうと駅に向かいましたが電車は動かず線路上をトボトボ歩いて大阪市内に向かいましたが、梅田新道には近づけず、能勢口の知り合いのお宅にたどり着いたのは夜でした。

やっと火もおさまり、大阪市内の自宅に行くくと焼けた電柱のそばに見覚えのある金庫がポツンと、これではだめだと尾道へ疎開しようとして2日間行列して汽車に乗ると前日の空襲があった神戸の町はまだメラメラと燃え恐ろしい光景でした。その中を汽車は走り8日の夜明けに尾道にたどりつきました。その後、辛い罹災者生活が始まりました。

戦争はしてはいけない！

それだけの人の人生を変えてしまったことか、今の若い人たちに知ってほしいです。

門真南支部 中江 麗子